

「入菩提行論」の註釋文獻について

江 島 惠 教

周知の如くシャーンティデーヴァの「入菩提行論」⁽¹⁾は六波羅蜜の實踐を通じて中道を實現して行くことを説いたものであり、特にその第九章「般若波羅蜜」は理論的に中觀思想を展開するものとして從來學界でも注目されている。ところでこの第九章には——他の章についても同様であるが——難解な偈文が多いために解釋が區々に分かれる場合が少なくない。従來は主にブラジュニヤーカーマティの細疏に依據して翻譯解釋敷衍され、また中觀思想史におけるシャーンティデーヴァの位置づけがなされているように思う。しかし筆者が主に第九章について諸註釋文獻を對讀した範圍では、ブラジュニヤーカーマティの細疏の取扱いは大分注意を要すると思われるのである。

そこで以下は第九章「般若波羅蜜」を中心にして、「入菩提行論」に對する註釋文獻の特色を簡単に述べてみたい。これらは主に西藏大藏經（印度選述部）にあるので書名は便宜上北京版の目録に従う。

(1)「入菩提行細疏」著者ブラジュニヤーカーマティ（十世紀末—十一世紀初頭）⁽²⁾ 北京五二七三

これは梵本の出版された唯一のものであり、他の註釋書よりも大部で經論の引用が豊富である。第九章における六九回の經典引用のうち「集學論」のそれと重複するものが二一個あり、また論書の引用では中觀關係で「中論」「六十頌如理論」「四讚歌」「入中論」等、更に「唯識二十頌」「眞理綱要」「數論頌」等の引用が見られる。引用の豊富なことから推測されるように、これは偈文の單なる語釋整理をするだけでなく、それから逸脱した傍論を展開したり、獨自の見解を披瀝したりすることが少なくない。

例えばブラジュニヤーカーマティは第九章第二—四偈に對する註、特に二諦を提示する第二偈に對する註の中で、間に偈文の語釋を與えながらも、この部分だけで中觀綱要書と言つても支障ないような論述を展開している。そしてこの中で重要な役割りを演じるのはチャンドラキールティの「入中論」

第六章とその自註とであつて、例えば、パヴァヴィヴェーカが論式として不備であると指摘するブッダバーリタ・チャンドラキールティの他生論遮遣の論證をそのまま採用し、それを纏めた「入中論」第六章第十四偈を散文に書き改めているにすぎない。他にもこの個所だけで「入中論」の偈文の引用が五偈半、「入中論疏」と極似せる文章が五個もある。これは

ブラジュニヤーカーマティがチャンドラキールティに依據するところの大きかつたことを示している。しかるにチャンドラキールティに全同かというと必ずしもそうではなく、ここには彼にはなかつたものも混入しているようである。即ちブラジュニヤーカーマティは——この點シャーンティデーヴァの偈文とは無關係に——世俗を實世俗 *tathya-samvrti* と邪世俗 *nithya-samvrti* とに分類して、それを「入中論」で言う「世間よりしつゝの諦 *lokata eva satyam*」と「世間よりしつゝの邪 *lokata eva mithya*」とに結びつけて説明している。⁽³⁾ ここで使用される「實世俗」「邪世俗」という語は少なくともチャンドラキールティの中論註や「入中論」の中では術語的には使用されていない。これは「中觀義集」の中に見い出されることなどからして、むしろバーヴァヴィヴェーカ系の術語か、でなければブラジュニヤーカーマティの時代における末期印度中觀派の術語であるらしいのである。

また外教批判について言えば、これはシャーンティラクシ

タの「眞理綱要」によつてその學説を略述し批判している。シャーンティデーヴァ（六五〇—七五〇年頃）とシャーンティラクシタ（六八〇—七四〇年頃）とはほぼ同時代人ではあるが、兩者の外教批判は必ずしも軌を一にしているわけではないので、このように「眞理綱要」に依據して偈文を解釋敷衍するのは問題である。

(2) 「入菩薩行善會」著者カルヤナーナデーヴァ（十一世紀前半）北京五二七五

(1) が引用が豊富であるのに對して、これは第九章において經論合せて僅か八回の引用があるにすぎず、他の四回は經名を擧げるにとどめている。これでもわかるように(1)の如くに傍論を展開することも少なく、偈文の逐語解釋に徹して獨自の考えを表面に打ち出すことを避けている。流動的なシャーンティデーヴァの偈文における前後の文脈關係に充分注意を拂つた上で、他の註釋書には見られないような洞察力溢れる註釋を施していることが間々ある。この意味でシャーンティデーヴァの偈文を読む際にもつと重要視されていい註釋書である。

(3) 「入菩薩行細疏」著者ヴァイローチャナラクシタ（十一世紀中頃）北京五二七七

著者ヴァイローチャナラクシタの著作としてシャーンティデーヴァの「集學論」に沿つて述作された「學華苞」（北京五三

三九）なるものが西藏大藏經に收録されているので、彼にはシャーンティデーヴァと學問上の連絡があつたと思われる。

この註釋書は量的には(2)とほぼ同じであるが、引用に關して言えば第九章には經論合せて二三個の引用があり、しかもそのうち一八個は(1)の引用と重複している。(2)ほど鋭い註釋は見られないにしても、(1)のように冗長な傍論はなく、例えば二諦說についても語釋の範圍を出ていないのである。従つて、註釋書としては比較的読み易く、また先に觸れたようにシャーンティデーヴァとの學問上の連絡が豫想されるので、安心して使用できる。

(4)「入菩提行意趣註疏殊勝作用」 著者ヴィブリーティチャンドラ（十二世紀後半—十三世紀初頭）北京五二八二

この註釋書でまず目につくのは、冒頭の歸敬偈の中にシャーンティデーヴァの傳記を折込み、すぐ後に「傳承 *hgyudpa* による」としてその小傳を記していることである。もしこれが著者自身の掲げたものであるとすれば、H・P・シャーストリによつて報告された十四世紀の古傳記よりもより古いことになるであらう。

第九章に對する註釋であるが、ここでは經論合せて四十數個の引用があり、しかもそのうちの四分の三は(1)の引用と重複する。また(1)と同様かなりの傍論を差挟んでおり、二諦說も「入中論」第六章によつて論じ、また外教批判も「眞理綱

要」に依つてゐる。その傍論の在り方は、(1)の場合と逐語的に一致する場合や、明らかにその要約としか解しようのない場合があつて、傍論の置かれてゐる場所と主題とが(1)とよく一致している。語釋の説明で幾分相違點がある程度で、第九章に關するかぎり(1)が底本になつてゐるとしか考えられない。従つてこれは(1)の場合と同様に取扱ひにかなりの注意を必要とする。

(5)「智慧品細疏」著者缺 北京五二七八

譯者の一人ローダンシェーラブ（一〇五九—一〇九七）の年代よりして著者は十一世紀より前の人であると推定される。

これは書名のとおりの第九章のみに對する註釋書であり、後に造論の意圖を述べた偈文と結びの偈文とがある。註釋の態度としては(1)(4)と違つて引用も少く語釋の説明に徹している。また、第九章のみに註釋が附されて一本となつてゐるのは、「入菩提行論」全體のうちでこの章が特に重視されたことを示すものとして注意されてよい。¹⁰⁾

(6)「入菩薩行解說細疏」著者缺 北京五二七四

これは「入菩提行論」の第二章と第三章とを一章として扱つてゐるので全體は九章からなつてゐる。そしてその第八章と第九章（「入菩提行論」では第九章と第十章）は「入菩薩行解説」（北京五二七九）としても西藏大藏經の中に收録されている。兩者は何れも著者名・譯者名・校訂者名が缺け、第

八章（「入菩提行論」では第九章）についてみても錯簡があつてテクストとしては粗雑で讀みづらい。

内容的には、二諦説の説明の中に、勝義を依他起相を増益する戲論の斷滅によつて、世俗を如顯現によつて説明する文があり、しかも詳細は他の中觀論書により理解されるべしとしている。また「外境ありと説く中觀派の宗義」なるものを論駁したり、シャーンティデーヴァが四念處によつて法無我を説示展開するのを「中邊分別論」第四章第一偈を以つて證としたりしている。

従つてこれはいわば中觀瑜伽行的思想を以つてシャーンティデーヴァを眺めているわけであり、諸註釋書の中で特異な存在を示している。またこのことはシャーンティデーヴァが中觀瑜伽行的な立場からも讀まれる可能性を示しているとも言えよう。

以上の六書はシャーンティデーヴァの偈文に沿つて註釋・敷衍をなすものであるが、ここに語釋を抜きにしたいわば解説書がある。

(7) 「入菩薩行難解處決定と名づくる書」著者クリシュナパーダ（クリシュナバト世紀末―十一世紀中頃）北京五二七六

この解説書は「入菩提行論」全體に歸敬・造論の理由・六波羅蜜の説示という三大科段を附し、第九章「般若波羅蜜」は勝義菩提心を説き、餘他の諸章は世俗菩提心を説くとも言

「入菩提行論」の註釋文獻について（江島）

つて、論全體を菩提心を軸にして眺めている。なお論述に際してナーガールジュナ・チャンドラキールティ・チャンドラゴーミン・ダンシュトラセーナの名を挙げ、他派の學者としてシャーンティラクシタの名を挙げ、またシャーンティデーヴァを「利行に専念する者」、大印 *mahāmudrā* の成就者としている。これはシャーンティデーヴァがチャンドラキールティの系統において見られたこと、しかも密教的な色彩の中でとらえられたことを意味する。

更に末尾で語釋を他の疏・釋疏に譲ると言っているのは、クリシュナパーダ以前に數多の註釋書が存在したことを意味している。現存の註釋書では(6)は別としてブラジュニヤーカーマテイの(1)が最古のものであるが、その(1)では諸處で異説のあつたことが言及されているし、ブラジュニヤーカーマテイより少し後輩のクリシュナパーダの時代には、(1)以外の註釋書が存在していたことが知られるのである。

次に註釋書解説書以外に、「入菩提行論」の主要な偈文を集めた次の二書がある。

(8) 「入菩薩行攝義」著者スヴァルナドヴィーパの師ダルマパーラ（十世紀中頃―十一世紀初頭）北京五二八一

(9) 「入菩薩行三十六義略攝」著者前同 北京五二八〇
二者のうち(8)は「入菩提行論」の十一主要義 *pradhānyārttha* を説くものとされ三十偈が抜粹されている。(9)は十一

主要義を擧げた三十六攝義 *pindārtha* を説くものとされ、(8)の三十偈を含めて八十一偈が抜粹されている。即ち(8)と(9)とは廣略の關係にある。ここで言われる十一主要義と三十六攝義とは論全體をそれぞれ十一項目或いは三十六項目に分けて見ようとするものであるらしく、事實抜粹された偈文を整理してみると不分明な點もあるがほぼそれに合致するようである。そしてその項目は律的乃至は實踐的色彩を持つており、著者ダルマバーラが律に精通した人であつたという傳承と何か關係があるように思われる。

以上「入菩提行論」の註釋文獻の特色を概観したが、それを見てもこれが如何に多様な見方をされていたかが知られよう。従つて我々としては、註釋文獻の取扱いに細心の注意を拂わないと、例えば(1)や(4)を重視しすぎるためにシャーンティデーヴァをチャンドラキールティの單なる繼承者としてしまふといった具合に、シャーンティデーヴァ自身の中觀思想を見失うこともありうる。註釋文獻はシャーンティデーヴァ思想を見るための二次的資料として使用されると共に、彼以後の末期印度中觀派の思想を探る上にも若干の興味ある問題を提示してくれると言ふべきである。

最後に西藏の學匠宗喀巴にも「入菩提行論」第九章に對する釋（北京六二三）があり、シャーンティデーヴァをチャンドラキールティの系統で眺めようとしている、ということ

附記しておく。

- 1 「入菩提行論 Bodhicaryāvatāra」の他に「入菩薩行 Bodhisattva-caryāvatāra」と呼ばれるものもある。
- 2 註釋者の年代は主に西藏の傳承によつて推定した。いまいち註記しないが以下においても同様である。
- 3 L. de la Vallée Poussin: *Prañākarāmatī's Commentary to the Bodhicaryāvatāra of Śāntideva*. Calcutta, 1901-1914. (第九章は *Bouddhisme*, 1898, にも收録) 最近 P. L. Vaidya 本 (1960) も出ている。
- 4 前掲 Poussin 校訂本 pp. 352-373.
- 5 Prasannapada (BB. No. 4) p. 36. 10-37. 5
- 6 前掲 Poussin 校訂本 p. 353. 7-18. *Madhyamakāvatāra* (BB. No. 9) p. 104
- 7 北京版西藏大藏經 BSTAN-ḤGYUR Dbu-ma Dsa 381 a
- 8 例えは *Artīśa* の「入二諦」(BSTAN-ḤGYUR Dbu-ma Gi 7a) にも出る。
- 9 *Indian Antiquary* XLI. 1913 pp. 49-52.
- 10 尙 P. L. Vaidya はこれを(1)の第九章の別行本のように考えづるが(校訂本 Introduction p. X) 誤解である。
- 11 BSTAN-ḤGYUR Dbu-ma La 383b. Śa 211 a
- 12 BSTAN-ḤGYUR Dbu-ma La 390a. Śa 217 a